佐賀県立博物館・佐賀県立美術館　〒840－0041 佐賀市城内1丁目15－23 TEL. 0952－24－3947 FAX. 0952－25－7006

佐賀新聞　2009(平成21)年12月26日(土)　県内文化欄　文化時評

文化時評 2009

美術

「画学生」に捧げる賛歌

野中　耕介

会期中1万人以上の入場者数を数え、大好評のうちに終了した「武藤辰平―フランスの風―」展に続き、間髪を入れず次の企画展「近代との遭遇―世界を見る・日本を創る―」展（1月1日から県立美術館にて。私は第二部「描くことの近代」を担当）の展示作業をおこなっている。昨年からこの二つの展覧会の準備に勤しんでいたが、両展にはひとつの共通点がある。それは、ともに日本の洋画家（たち）の西洋への留学、そこでの「画学生」としての学びの様にスポットを当てていることである。

明治以後、多くの日本人洋画家が海外に渡り絵を学び、それぞれの美を深め、開花させてきたことはよく知られている。佐賀の洋画家たちも同様で、例えばその一人、武藤辰平の画業に見られるように、異国での学びは衝撃的な体験であり、画風はもちろん、その後の生涯さえ決定づけるほどの影響力がある。武藤、そして時代を遡って百武兼行（明治4年渡欧、留学先はイギリス、フランス、イタリア）、久米桂一郎（明治19年渡欧、留学先はフランス）、岡田三郎助（明治30年渡欧、留学先はフランス）等近代洋画家たちの留学、その学びの様子を丹念に調べてみると、留学の時期と年齢、場所、そしてその事情や背景がそれぞれ異なっており、それに伴い学んだ内容と受けた刺激もまた異なっているのが分かる。そしてそのことが、画家としてのかれらのきわだった個性を育み、日本近代洋画史に新時代をもたらすことにつながっていくのである。

洋画家たちの留学期の作品を見ると、そこには、かれらの西洋美術の本質を探る真摯な目とともに、その美意識と技術を何とか吸収し、自身のものにするための苦心が垣間見えて実に興味深い。

百武兼行は西洋のアカデミックな絵肌を再現するために、油絵の具の扱いに多大な関心を払っているし、久米桂一郎は留学の最初に、フランス流の木炭デッサンの難しさに大いにとまどっている。そして、岡田三郎助の留学は、以降のかれの画作のテーマとなった、西洋と日本の伝統美の融和に開眼する、おそらく最も重要なきっかけとなったと思われる。学びを通して、画家＝表現者としての自我を確立すること。このことはむろん、現代の画学生においても同様であり、学びの苦心と喜びは、現在も変わることはない。

この二つの展覧会を、現在のあらゆる画学生―そして、美術を学ぶことの喜びを知る人々も含めて―の皆さんに捧げたい。これは企画の段階から、私がひそかに胸に抱き続けていた思いである。（県立美術館学芸員）